

IV 平成 28 年度原子力防災訓練関連の新聞記事

平成 29 年 1 月 29 日 (日) 南日本新聞

各新聞社に無断で転載することを禁止します。



川内原発 地震時の事故想定

避難経路の復旧作業訓練をする陸上自衛隊員 28 日前、薩摩川内市富田町の富田浜駐車場、橋口実昭撮影



「熊本」教訓 4200 人訓練

鹿 9 市町 屋内一時退避や被災道確認

鹿兒島県は 28 日、九州電力川内原発（薩摩川内市）の重大事故を想定した原子力防災訓練を、原発から半径 30 ㎞ 圏内の 9 市町と共催で行った。約 1800 機関の関係者や住民ら計約 4200 人が参加。昨年 4 月の熊本地震を踏まえ、家屋の倒壊を想定して避難所であったん屋内退避したり、上空から避難道路の被災状況を確認したりする訓練に取り組んだ。

「脱原発」を掲げる三反園知事が就任して初めての訓練。川内原発の安全性や避難計画を検証する県の専門委員会委員 11 人も視察し、避難支援の在り方などについて指摘した。詳しくは 2 月 7 日の第 2 回専門委員会合で協議する。三反園知事は委員からの意見などを踏まえ、避難計画を見直す考えだが、実効性ある計画に改善できるかが注目される。

訓練は、薩摩半島西方沖を震源とする震度 6 強の地震が発生し、川内原発の外部電源が途絶え 1 号機の 1 次冷却水が漏れ、非常用電源も壊れて炉心溶融に至ったとの想定。薩摩川内市街地のオフサイトセンターに現地対策本部を立ち上げ、県や 9 市町とテレビ会議で被災状況や対応について確認した。住民はまず 5 ㎞ 圏の

要支援者、一般の順に避難。5 ㎞ 圏住民はひとまず自宅などで屋内退避し、一部地域で空間放射線量が上昇したのを受け避難した。このうち 9 市町の約 500 人は、建物倒壊が相次いだ熊本地震を踏まえ、自宅から近隣公民館などに移り屋内退避を実践。自衛隊による孤立住民の救助もあつた。

訓練は、薩摩半島西方沖を震源とする震度 6 強の地震が発生し、川内原発の外部電源が途絶え 1 号機の 1 次冷却水が漏れ、非常用電源も壊れて炉心溶融に至ったとの想定。薩摩川内市街地のオフサイトセンターに現地対策本部を立ち上げ、県や 9 市町とテレビ会議で被災状況や対応について確認した。住民はまず 5 ㎞ 圏の要支援者、一般の順に避難。5 ㎞ 圏住民はひとまず自宅などで屋内退避し、一部地域で空間放射線量が上昇したのを受け避難した。このうち 9 市町の約 500 人は、建物倒壊が相次いだ熊本地震を踏まえ、自宅から近隣公民館などに移り屋内退避を実践。自衛隊による孤立住民の救助もあつた。

また、三反園知事が昨年夏、原発周辺を視察した際に寄せられた住民の声を基に行われたことになった九電社員らによる山間部の高齢者避難支援や、放射線防護施設の運用訓練などもあつた。

訓練で大きな支障はなかったが、最初の災害対策本部会議の際、前回同様テレビ会議でトラブルがあり、県庁での会議内容の音声と映像が一時、9 市町に発信できなかった。委託業者が誤って電源ケーブルに接触し抜けたのが原因という。

訓練で大きな支障はなかったが、最初の災害対策本部会議の際、前回同様テレビ会議でトラブルがあり、県庁での会議内容の音声と映像が一時、9 市町に発信できなかった。委託業者が誤って電源ケーブルに接触し抜けたのが原因という。

訓練を視察した三反園知事は「さまざまな反省点や改善点がある」と思っているので、見直すべき点は見直す」と話した。（赤間早也香）

訓練を視察した三反園知事は「さまざまな反省点や改善点がある」と思っているので、見直すべき点は見直す」と話した。（赤間早也香）

訓練を視察した三反園知事は「さまざまな反省点や改善点がある」と思っているので、見直すべき点は見直す」と話した。（赤間早也香）

訓練を視察した三反園知事は「さまざまな反省点や改善点がある」と思っているので、見直すべき点は見直す」と話した。（赤間早也香）

南さつま市 訓練初参加 誘導スムーズに対応

訓練には、30^キ圏外の南さつま市など8市町も初めて参加した。

同市の金峰文化センターに設けられた避難所には、日置市の住民約120人がバス6台で避難。両市の職員が協力し、スムーズに対応した。

住民はバスから降り、センター入り口で氏名確認。両市職員が3班に分かれてチェックしたため、受け付けは7分ほどで終わった。昼食後、伊方原発(愛媛県)の避難訓練の映像を鑑賞。両市長も連携強化を確認した。

日置市日吉町山田の農業、室屋栄蔵さん(82)は「誘導はスムーズで混乱はなかった。ただ、本当の事故の際はマイカーで来るかもしれない」と話した。

南さつま市総務課の田元利弘危機管理官は「日置市と綿密な計画を組んだため順調だった。事故発生時は想定外の事態が起こるので、より連携を密にしたい」と話した。

(勝目博之)



避難所へ向かうため、公用車に乗り込む住民
＝始良市蒲生の松生集落

住民避難の手順確認

原発事故想定し防災訓練

始良

九州電力・川内原子力発電所の事故を想定した始良市の防災訓練が28日あった。30分圏内生集落の住民5人が避

難。市や消防、警察など関係機関は、通信連絡体制や住民避難の手順を確認した。

県の訓練に合わせて行い、約30人が参加した。薩摩半島沖で発生した地震により炉心溶融に至り、山あいにある松生集落では家屋倒壊や車両破損のため、自力避難できないとの想定。

集落の避難対象者は6世帯7人で、駆けつけた消防、警察、市職員らが連携して住民を公用車で救出した。道路損壊を想定し、鹿児島市へ迂回するルート

を通り、始良高齢者福祉センターまで避難。住民は健康チェックを受けた後、原子力災害の備えや対応をまとめたビデオを見て意識を高めた。

参加した久保山容子さん(83)は「屋内退避や避難の手順がよく分かった。万に備え、日頃の準備が大切だと

あらためて思った」と話した。

消防隊や消防団員の防護服脱着訓練もあった。(山下博行)

社説

2017・1・31

原発防災訓練 改善重ね実効性高めよ

九州電力川内原発の重大事故を想定した原子力防災訓練があった。県と薩摩川内市など原発から30⁺圏内の9市町の共催で、住民ら計約4200人が参加した。

震度7が続発した昨年4月の熊本地震以降、初の訓練である。自宅に退避したものの、倒壊の危険が迫って近隣の公共施設にあらためて避難する訓練も加えられた。

新たな想定で避難計画の実効性を高めていこうという方向性は評価できる。肝心なのは、浮かび上がった課題に適切に対応することである。

薩摩川内市亀山地区では、コミユニティーセンターの収容人数に不安の声が上がった。住民7千人に対して、100人足らずしか入れないという。

熊本地震では、1回目の震度7の後、自宅を出て駐車場などで夜を明かす住民の姿が目立った。強

い揺れから一定時間を経て同等以上の揺れが発生する可能性は高く、住民の行動は正しかった。だが、原発事故で放射線量が上昇している場合、屋外で身をさらし続けるのは極めて危険だ。

県や自治体は、住民数と耐震化された避難所の収容人数をあらためて点検する必要がある。その上で、建物から人があふれた場合の対応を検討し、住民に周知しなければならぬ。

10⁺以遠の社会福祉施設などの避難では、昨年続き風向きに応じて避難先を選ぶ「避難施設等調整システム」が活用された。施設関係者からは、入所者の移動手段確保への不安も聞かれた。入所者に限らず、災害弱者には十分な配慮が欠かせない。

実際の事故となれば、屋内退避を呼びかけても、原発から少しでも離れようとする住民が続出する

今回の訓練は、昨年末設置された川内原発の安全性や避難計画を検証する専門委員会の委員12人中11人が視察した。来月7日の第2回会合で、視察を踏まえて避難支援の在り方を協議する。

三反園訓知事は委員からの意見を踏まえ、避難計画を見直すという。広く目配りして、改善を続けてもらいたい。

将来的に原子力発電から脱却し「再生可能エネルギー県」を目指すというのが三反園知事の基本姿勢である。稼働中の原発がある以上、防災の備えに万全を期すのは当然だが、脱原発の歩みを前進させる具体的な行動も問われていることを忘れてはならない。

スピード必要の声も

地震想定 川内原発周辺で防災訓練



専門委委員「実効性高めて」

二反副知事の肝いりで設置された第三者委員会「県原子力安全・避難計画等防災専門委員会」の委員11人も、訓練を視察した。川内原発近くの寄田地区では、グループホームの入所者や住民が避難する流れを確認。県政射撃場を調べる訓練や薩摩川内市のオウサイトセンターでの会議も見学した。

県職員に質問する「原子力安全・避難計画等防災専門委員会」の委員たち。薩摩川内市寄田町の

取材に訪じた専門委の相良雅史・専学科学技術研究開発機構主任研究員は、日置市の伊集院総合運動公園で住民270人の汚染の検査に約45分かかっていたと話し、「整千人規模で避難してくれば、あそこで滞留してしまう」と指摘した。機野敏之・鹿児島地域防災教育研究センター長は「訓練と現実との不一致は、自然災害なら経験を重ねてこなされるが、原子力災害は起こつてはいいけないこと。設定を委えた訓練を重

ねて、実効性を高めてほしい」と話した。(中地雄)



福祉車両に乗り込めば中向ソエさん＝薩摩川内市寄田町

九州電力川内原発が地震で被災し、放射性物質が放出される事態を想定して、28日に実施された原子力防災訓練。県内18市町で約4300人が参加した。バスによる広域避難や除染作業の訓練などに加え、九電が在宅の高齢者の避難を支援する新たな試みもあったが、課題も見えてきている。

九電が高齢者を支援

今回の訓練では、九電が出川郡に住む高齢者の避難支援に初めて取り組んだほか、多くの家屋が被災した熊本地震を踏まえ、5、30歳の住民が屋内退避する手順が見直された。川内原発から南へ3.5キロの薩摩川内市寄田町の新田地区では午前8時過ぎ、夫と暮らす中向ソエさん(84)を九電の福祉車両が迎えに来た。ソエさんは足の具合が悪く、民生

委員に付き添われて車いすで車に乗り込み、集合地点の寄田地区コミュニティセンターへ向かった。原発から約15キロ離れたいちき串木野市の中央地区では、午前10時に屋内退避を指示する防災無線が流れ、約80人が商店街の集客場に集まった。屋内退避するはずの自宅が地震で壊れた場合、近隣の公共施設に退避する訓練。定められた指宿市の避



バスの除染をする自衛隊員ら＝日置市の伊集院総合運動公園

若者・子どもも姿少なく

日置市伊集院町の伊集院総合運動公園では、除染や安定ヨウ素剤を配る訓練があり、約千人が参加した。正午過ぎ、いちき串木野市や薩摩川内市から計270人を乗せたバスが、次々と到着。住民はテントに誘導され、白い防護服に身を包んだ市職員が測定器で放射能汚染の状況調べた。汚染されていると判定された約70人は汚染場所を突き取って除染する作業を受け、安定ヨウ素剤に見立てたタミールの薬も配布され

た。参加したいいちき串木野市の祐下和美さん(66)は「除染で一人ひとりに時間がかかりすぎ。もっとスピードが必要なのは」。騒動した雰囲気はなかったが、体内検査を受けるためのマスクをしていない参加者も多く、若者や子どもの姿もほとんど見られなかった。薩摩川内市の60代の女性は「放射能の影響を受けやすい子どもや妊婦にも、もっと参加を呼びかけたほうが良かったのでは」と話した。(神崎卓林提供)

難所も被災したとの想定で、代わりにバスで約30分離れた鹿児島市の砂辺町に向かった。同市内で働く娘と暮らすという宮崎原良也さん(80)は「平日は自

家用車で避難できないので不安があった。今回は大型バスだったので荷物も運ぶことができ安心した」と話した。(田中啓介、本崎雅義)

地震住宅倒壊想定し訓練

川内原発実効性に課題

九州電力川内原発（鹿児島県薩摩川内市）での過酷事故を想定した防災訓練を 28 日、鹿児島県と原発周辺 9 市町が実施した。昨年 4 月の熊本地震を踏まえ、住宅が壊れた場合の住民避難の手順を確認する新たな取り組みも行ったが、計画通りに避難できるか、実効性になお課題が残った。

住民や自衛隊、海上保安庁など 180 機関、計約 4200 人が参加した。大規模な訓練は 2015 年の再稼働後 2 回目。原発の 5、30 号機の住民はまず自宅など屋内に避難し、放射線量の実測値に応じて避難することになっていくが、震度 7 が続発した熊本地震では多くの家屋が倒壊し、屋内にとどまるのが難しかった。訓練では住民が自宅の代わりに近くの公共施設に避難する手順を確認した。だが、参加した同県いちき串木野市の主婦

(70) は「いざ事故になったら、車で我先に逃げる人が多いのでは」と話した。九電が福祉車両を出して山間部の住民の避難を支援したほか、県独自のシステムを使って 10、30 号機にある福祉施設の入所者らを実際に 30 号機外の鹿児島市などへ避難させる訓練も実施した。

三反園訓知事は「様々な反省点、改善点が出てくると思う。国や市町とも連携して、避難計画の見直すべき点があれば見直したい」と述べた。

（中島健）



川内原発の近くからバスで避難し、汚染状況の検査を受ける住民＝鹿児島県日置市の伊集院総合運動公園

「全員避難できるか」

10、30 号機の医療・福祉施設の避難先を事前に決めず、避難が必要になってから探す独自の調整システムを用いた訓練も実施された。だが参加者からは疑問

の声が相次いだ。原発の南東約 20 号機にある鹿児島県いちき串木野市の養護老人ホーム「市来松寿園」。午前 11 時ごろ、県から電話で避難先が伝えら

れ、ファクスで避難ルートの地図が届くと、入所者 3 人と職員が施設の車で 25 分かけて 30 号機外の施設へ向かった。職員の辛島彰浩さん(38)は「流れは分かっていたけれど、これで本当に全員避難できるのか」。

入所者は特別養護老人ホームとあわせ約 110 人。認知症で寝たきりの人も多い。調整システムでは避難先が直前まで分からず、入所者の健康状態などを事前に打ち合わせる事ができない。施設を運営する社会福祉法人の丸田大剛理事長(59)は「システムを使って避難するのは難しいと感じる。移動中に体調を崩すな

ども心配だ。施設をシエルター化してとどまるしかないのでは」と指摘する。避難先として訓練に参加した特養ホームの吉永正人事務長(66)は「51 人を受け

入れる想定だったが、現実的ではない。職員や機材も足りない。何人避難させられるのか、県は事前に把握しておいてほしい」。

（岩波精、野崎智也）

川内原発 30キロ圏の4200人訓練 鹿兒島県専門家委が視察

九州電力川内原発(鹿兒島県薩摩川内市)で重大事故が起きたと想定した大規模な防災訓練が28日、同市などであり、住民と自衛隊など180機関の関係者らからなる過去最大規模の約4200人が参加した。原発の安全性を議論するため鹿兒島県が設置した専門家委員会が視察しており、委員たちが避難計画をどう評価するかが注目される。

昨年7月の三反園(三反園)知事就任後初めての原子力防災訓練で、県と原発30キロ圏の9市町などが参加。川内原発が震度6強の地震で外部電源を喪失し、1号機で非常用電源も故障、全交流電源喪失で炉心溶融に至った想定

で実施した。県の避難計画に基づき、訓練は原発5キロ圏の住民は即時避難、5〜30キロ圏は屋内に退避した。熊本地震で多数の家屋が損壊したことを考慮し、5〜30キロ圏でも家屋倒壊で屋内退避できなくなった想定を新たに取り入れ、一部住民約500人は近くの避難所に移った。

視察には専門家委のメンバー12人中11人が参加。5キロ圏の高齢者ら要援護者の避難支援のほか、放射性物質の汚染状況を調べる住民のスクリーニング、安定ヨウ素剤の配布訓練などを確認した。

相良雅史・放射線医学総合研究所主任研究員は「スクリーニングの状況が気になった。



放射性物質の汚染状況を調べる「スクリーニング」訓練を視察する三反園知事(中央)―鹿兒島県日置市伊集院町野田の伊集院総合運動公園で28日午後1時7分、杉谷健太撮影

何千人も来たらそこでひっかかってしまおう」と述べた。塚田祥文・福島大教授は「要支援の被災者を運ぶときに(介護者の)数が本当に足りるかどうかが気になった」と語った。

専門家委は2月7日の次回会合で、今回の視察結果なども参考にしながら、安全性や避難計画の見直しの必要性について議論する。視察に参加した三反園知事は「専門委員会の視点で改善点があれば(避難計画の)見直しに生かしていきたい」と述べた。

【杉谷健太、宝満志郎】

川内原発の事故想定で訓練

鹿児島、4200人が参加



九州電力川内原発（薩摩川内市）で重大事故が発生したことを想定し、鹿児島県と周辺自治体は28日、防災訓練を実施した。2016年7月に脱原発を掲げる三反園訓知事が就任して以降、原発事

故を想定した防災訓練は初めて。原発周辺の住民のほか、九電や自衛隊を含めた計約4200人が参加した。山間部に住む高齢者らの避難支援や、地震などで家屋が倒壊した被災者をどう安全に屋内退避してもらうかなどの手順を共有するのが狙い。視察した三反園知事は記者団に「反省点を踏まえ、国や関係自治体と連携し避難計画を見直した

と述べ、計画の見直し作業を行うと明言した。16年12月に県が設置した専門家委員会のメンバーも訓練を視察。浅野敏之・鹿児島大地域防災教育研究センター長は「原子力災害は現実と訓練との差がなかなか埋められない。いろいろな訓練を設定し、実効性のあるものを考えないといけない」と話した。

川内原発から約1キロ離れた薩摩川内市の福祉施設では、九電の福祉車両で、車いすに乗った高齢入所者を施設職員らが付き添い避難させる訓練が行われた。県庁には災害対策本部が設置され、三反

園知事が県幹部や九電から状況報告を受けた。屋内退避の訓練を体験した薩摩川内市の民生委員、香山由美子さん（69）は「自力で避難できない高齢者も多いので、地域住民で手を貸せる関係をつくりたい。ただ地震に加えて原発事故も起きれば、自分や家族だけでも早く逃げたいと思うかもしれない」と複雑な心境を吐露した。

川内1、2号機は新規制基準下で14年9月に全国の原発で初めて適合性審査に合格。15年8月以降に順次、再稼働した。

鹿児島県危機管理局
原子力安全対策課

〒890-8577

鹿児島市鴨池新町10番1号

Tel : 099-286-2378

Fax : 099-286-5925